

大正・昭和初期における洋装下着の受容

京都女子大学准教授 青木美保子

Adoption of Western-style underwear in the Taisho and early Showa period

Mihoko AOKI, Associate Professor, Kyoto Women's University

Women's magazines published in Japan during the Taisho period (1912–1926) and the ensuing early years of the Showa period, during which Western-style clothes started to be adopted here, indicate Japanese women's confusion at their first encounters with Western-style underwear. It was totally new to them, and they adapted to it through uninformed imitation. The magazines introduced the details of underwear items, including their functions, how to put them on, and the order in which they were worn, such as the sequence of brassiere, followed by corset, and chemise. Such articles however carried a wide variety of descriptions, so diversified that it must have been difficult for readers to tell which descriptions were correct. Relying on such ambiguous information, women acquired Western-style underwear items by producing them by themselves at home, purchasing ready-made items, or ordering them from dressmakers, and wearing them based on their own individual interpretations. By way of this trial-and-error process, the adoption of Western-style underwear spread among Japanese women, and the culture of Western underwear was gradually established in Japan. However, from about ten years after the beginning of the Showa period in 1926, the trend faded away because of the onset of the Second World War. It was not until after the end of the war that the use of Western-style underwear was revived in Japan.

はじめに

まず、下着から作らねばなりません。コルセットもブラジャーも、その他なんにも売っていない時代です。今は世界の流行はその日のうちに地球じゅうに伝わって、すぐに取り入れられますが、当時はそんなありさま。その後も下着はずっと長く売られてなくて、私などイブニングドレスを着るときは、見えないところは真綿を巻いたりしたものでした（註1）。

大正 15 (1926) 年にドレスメーカー女学院を設立した杉野芳子が語る追憶の一文である。昭和 4 (1929) 年に初めて生徒達全員に、卒業式で自作の洋服を着装するため純白の式服を製作させた時の杉野の思い出なのだが、ここから、昭和初期の洋装下着受容の状況が読み取れよう。そして、このような未成熟の洋装文化のなかで、イブニングドレスの下に真綿を巻いて、体型を補正したと杉野は語る。さすがに洋裁学校の校長だけのことはあると、その知恵と工夫に感心させられる。

本稿では、当該時期の婦人雑誌『主婦の友』、『婦人画報』、『婦人公論』及び、京都服飾文化研究財団 (KCI) 所蔵の大正期の女性の下着資料を手がかりに、現在世界トップレベルの日本の下着文化の原点として、未知の衣類である洋装下着を取り入れるときの女性達の戸惑い、西欧の下着文化をみようみまねで受容する姿、このような洋装下着受容の諸相をあぶりだしてみたい。

1……………体型を整えるための洋装下着

洋裁の作図法伊東式の考案者で昭和 7 (1932) 年に伊東洋装研究所を設立した伊東茂平は、昭和 8 (1933) 年に、『婦人画報』2 月号の記事「洋装の美をもたらす下着の知識」の冒頭で、以下のように記している。

中にはまだ上に着て人目につく部分さへ、美しくあれば、下着の方は、着て居さへすればよい、という御考の方が多いようですが、それでは決して、完全な洋装の美しさを、作り上げられるものではないのです。(中略) 今日のレディー・メードのものには殆ど絶対に具合よく洋装美を発揮させるやうなものがないのですから、御自分でお作りになるか、或ひは洋服屋に作らせるか、しなければならぬのですが、これには現在の服にはどんな種類の下着が必要であるか、どんな形を選べばよいかといふやうな、一般の下着に対する知識をお持ちにならねばなりません。何かの機会に人前で着かへても恥ずかしくない下着、肌にピッタリ合つた流行のドレスの美しい線を殺さないだけでなく、それをもつと強調するやうな下着をお召になりたい方は、まず、御自分で下着の形について見る眼をお養ひにならねばならないわけです (註 2)。

洋装は普及しつつあるもの下着にまで気を使うに至っていない未成熟の洋装文化の様子

が読み取れる。この記事において、伊東はこうした思いをもって啓蒙的に、外国雑誌から抜き出した写真を示しながら、洋装下着の種類や着装時の注意点など事細かに説明している。そして伊東はその後、同誌の4月号で「着易く形のよいシミーズの作り方」(註3)、5月号で「胸の形を美しくするブラジエールの作り方」(註4)、7月号で「パンティーズ二種」(註5)、9月号で「スリッパの作り方二つ」(註6)と、洋装下着の作り方に関する記事で図から縫製方法まで丁寧に解説している。

他の婦人雑誌においても昭和初期には、このような洋装下着の情報や作り方の記事が散見される。その背景に日本に洋装文化が確立しつつあることはもちろんであるが、もう一つ考えられる要因として、洋服の流行の変化が考えられる。西洋では1920年代、ウエストをしぼらないゆったりとしたシルエットだったが、1930年頃、バストからヒップにかけて体のラインに沿ったほっそりとしたシルエットが流行しはじめる。これを受けて日本でも、伊東の言う「肌にピッタリ合った」デザインが西洋と同時代的に流行しはじめたことで、下着で体型を整えることは洋服を美しく着こなすための大切な要素となったのであろう。日本の洋装の女性達は、この時期に洋装を取り入れた人だけでなく、すでに洋装をしていた人も、ここにきて初めて下着に気を使わざるを得ない状況となったのである。

ここで、この洋服の流行の変化に最も影響されたであろうブラジャーとコルセットの受容の実態に触れてみよう。

[1-1 ブラジャー]

昭和8(1933)年の『婦人公論』2月号に、冬の下着について読者が質問し、杉野芳子が回答している記事が掲載されている。読者の質問の一つとして、以下のような記述がある。

冬の洋服の下着をお示してください。夏と同じに、シュミーズ、ズロース、コーセツト、ブルーマー、ブラジエア、スリッパの順序で他は何もつけないのが正式でせうか(註7)。

それに対し杉野は、以下のように回答している。

ブラヅジエアー(お乳^{ちちおき}押へ)は、間に着るものではなくて直接肌に着るものです。ずつと以前はお乳の大き過ぎて困る方だけに用いられたものですが最近はそのばかりでは無く、夏を涼しく^{アツ}工風^{アツ}する為に薄物ドレスの下にシミーズを省いて用ひたり、或は冬でも殆ど上半身を露出するイヴニングドレスを着る場合同じ様に下着の数を

少なく、ブラズジエアー、ズロース、コーセット、ブルマー、スリッパの順に致します（註8）。

この記事から、ブラジャーが「お乳おさへ」と呼ばれていた時代、文字通り、胸を押さえるために、ブラジャーをシュミーズの上に身に着けていた人もいたのであろうことがわかる。この下着の着装順序については、後で詳しく見ていくが、いずれにせよ、この時期にブラジャーが、大きな胸の女性達だけのものではなく、体型に関わらず身に着ける洋装下着の一つになりつつあることが分かる。そしてそのブラジャー受容の誘因の一つに、夏を涼しく過ごすためにシュミーズの代わりに取り入れたことがあったようである。多くの女性の洋装着用のかっかけが夏のアップパツパであったことと通じる日本ならではの事情が興味深い。

ブラジャーの機能が胸を押さえるためのものから胸の丸みを生かすためのものに変化した点については、松井寿の論文「大正時代の昭和初期における洋装下着一雑誌記事を中心として」（註9）で詳細な分析がなされているので参照されたい。

[1-2 コルセット]

昭和8（1933）年の『主婦の友』5月号の記事「外出着のお支度」には、研究会の対談の会話を記述した本文に、「乳おさへ」、「コルセット」、「靴下」、「ブルマー」、「スリッパ」の順で洋装下着を身に着ける女性のイラストとともに、その着方が丁寧に解説されている。そのなかにコルセットを身に着ける女性のイラストがある（Fig.1）。Fig.1 右の解説には、「コルセットは鋼鉄か鯨骨の入ったものが、スタイルを美しくする」とあり、対談の記述にも「ゴムだけの柔らかいコルセットが、美しい線を出すといふのですが、いかがでせう」という質問に対し、研究会参加者のひとり杉野芳子は以下のように述べている。

それは外国人の美しいスタイルの方のいふところで、お腹のふくれた日本の方は、（お立派な体格の方はお赦してください）硬いコルセットでしつかりとおさへなくては駄目です。殊に初めて洋服を召す方は、昔のまま一つまり〔図三〕（筆者加筆：Fig.1 右を示す）のやうに前中央で合せる（鋼鉄が入っている）もので、後も同じく鋼鉄が鯨骨が入って、中央の編上げ紐で調節できる（〔図四〕参照）（筆者加筆：Fig.1 左を示す）理想的なもので、体の形を整へてゆかねばなりません（註10）。

そして、Fig.1 の解説には「腰の形の悪い方は後に綿を入れる」とある。本文にも以下の

ような杉野の発言が記されている。

コルセットの下へ綿を入れるのです。〔図四〕参照）大きさは御自分で研究して頂くとして、夏で暑かったら、糸瓜を切つて入れるのです。（中略）ここが高くなると胸からヒップの線（腰の一番太いところ）までの間隔が、つまつて見えるのです。もし背の低い方ならばお尻のありかがかくれ、スカートがここからすつとなるので、丈高く見えます（註11）。

洋装した姿を少しでも本場西洋のシルエットに近づけたいと考える杉野の工夫である。

ここで、このヒップの位置を高く見せる工夫に関連する実物資料を取り上げたい。KCIでは、貞明皇后着用とされる大正期の下着類を所蔵している。その一つがドロワーズである（Figs.2）。このウエストのダーツやタックに注目したい。ウエストを紐で締めるようになっているが、その紐は、引き締めた際にギャザーが前に入ってお腹のあたりが膨らまないように、つまり後だけにボリュームが出るよう腰骨あたりに留めつけられている。さらに、後ろ中心より大きなタックが4つもあり、一方、お腹のあたりはすっきりするようにダーツが配されている。コノドロワーズを着装すると、おそらくヒップの上あたりで布がたまり膨らんでみえるだろう。つまり、この大正期の下着にも、実際よりヒップが高くみえる工夫がみられるのである。

そして、この素材は、シルクであるから、下にコルセット、靴下、ズロースなどを着けたうえで、このドロワーズが着用されたのであろう。このドロワーズを含む資料群のなかにはコルセットも含まれている（Figs.3左）。コルセットはガーター（靴下吊り）がついていて、靴下の方にはループがついているから、ガーターの紐をループに通して靴下を支えたのであろう。

これに関連してこの靴下のもう一つの注目点を記しておく。この資料群には、この肌色の靴下のほかに、黒い靴下がある（Figs.3右）。サイズは肌色の方が黒色のものより足のサイズで1.5 cm、縦の長さで6 cm短い。靴下に関連した女性雑誌の記述としては、昭和7年の『婦人画報』5月号に痩せた女性の下着の着方の解説があり、そこに「靴下も毛のを下に穿き其の上にシルクの靴下を穿きます」（註12）とある。また、昭和9年の『婦人公論』2月号の記事「簡単に寒さを防ぐ新工夫 洋装の下着として」には、「女学生位の方とか、田舎へでも御いでになる場合又はスポーツにはウールのスタッキングもよろしいでせうが、タウンウェイでは絹に限ります」（註13）とある。つまり、この肌色のウールの靴下は防寒用で、もしかしたら、この黒の靴下の下に穿かれたのかもしれない。

ファッションデザイナーで昭和 12 (1937) 年に田中千代洋裁研究所を設立した田中千代は、同年の『婦人画報』の連載記事「洋装美に表情をつくるには」の 12 月号「コルセットの話」で、コルセットの歴史からその最新情報まで詳細に解説している。それによると、欧州大戦まではウエストを締めつけていたコルセットであったが、「欧州大戦が生んだ簡単服」、ウエストを締めないヒップまで真直ぐな形の服が流行すると、そのコルセットの使用は減り、1925 年頃にはヒップを矯正するコルセットがみられたという。ところが、1929 年頃からウエストがノーマルな位置に戻り、ウエストからふあヒップにかけて体の自然な線を見せるタイトなスカートの流行がはじまり、「今度は最も自然な人間の線を出す為のコルセットが必要になつた」。この目的の為にゴムのコルセットが全く新しいものとして現れ、人々は前のコルセットと今のコルセットを区別する為に、この新しいコルセットを「ファウンティション」と呼ぶようになったという (註 14)。1920 年代から 30 年代の洋服の流行の変化に伴いコルセットの形や機能が変化した様子がよくわかる。

確かに、Figs.3 のコルセットには、Fig.1 のような昭和期のコルセットに見るウエストあたりの補正効果は、無さそうである。

そして、田中はコルセットに付いているガーターについて以下のように解説している。

コルセットをはいたら必ず靴下を吊ってコルセットの位置を保つ様にしなければならない。ガーターは靴下を吊るだけが目的ではなくてコルセットを正しい位置に保つ事、コルセットの裾のしまりをつけるのにも大切なものである (註 15)。

コルセットからガーターが消えて久しい現代にあって、見落としがちなガーターの役割である。

2……………何をどう着るのか

先述のように、昭和 8 (1933) 年、杉野は「ブラズジェアーは、間に着るものではなくて直接肌に着るものです」と指摘しているのであるが、それより前、昭和 4 (1929) 年の『婦人公論』4 月号の美容相談の記事に、「洋服下着の正しい着方」についての問答が掲載されている。質問者が「コルセット或いは靴下つりをブルーマーの上につけましたら用をたすのに大変不便です」として下着の着装順を尋ね、それに対し美容家のメイ牛山は、以下のように回答している。

貴女の下着の着け方は間違っています。順序は、最初に、木綿の下着、次に冬季ならば毛織類の暖かいものをつけ、コルセット、乳おさへ、ブルーマー、スリッパ（和服の長襦袢に匹敵するもの）、上着（ドレス）（註16）

コルセットをブルーマーより先に着装するのだと支持している点は、この時期の着装順としては正しい指示なのであるが、ここで注目すべきは、「乳おさへ」を身に着けるタイミングである。「木綿の下着」、おそらくシュミーズとズロースが一体化したコンビネーションのことであろうが、これを身に着けた後に「乳おさへ」を身に着ける、つまり、ブラジャーの下には何かしらの下着を着るよう指示しているのである。メイ・牛山は、昭和初期に欧米の最新技術を導入し美容界を牽引する美容師として新聞雑誌で注目されていた人物である。こうした人物でさえこのような発言をしていることに、先述の昭和8（1933）年に杉野が「ブラッジエアーは、間に着るものでなくて直接肌に着るものです」と指摘していることを勘案すると、この昭和8年前後までは、シュミーズの上にブラジャーをする女性が多かったことが推測できる。

そしてこの時期、女性雑誌には、こうした下着を着ける順序に関する読者と洋裁専門家の問答、あるいは、どのような下着をどの順番で着用するのかを解説する記事が散見される。このことは、とりもなおさず、こうした記事が女性達の求める情報であり、裏を返せば、普及し始めた洋装下着をどのように着装すればいいのか戸惑う女性達がいかに多かったかということである。

『婦人画報』の洋装下着の着方に関する記事で早い時期のものとしては、大正14（1925）年に掲載の記事「婦人服の下着の着方」（註17）に、洋装下着を身に着ける順序がシーズン別に記されている。それをまとめると、以下のようなになる。

冬： メリヤスのコンビネーション（もも引きと袖なしシャツとの合わさったもの）、シュミーズ、コーセット、靴下、コーセットカバー、ペティコート、あるいは、コーセットカバーとペティコートの代わりに両者をひとまとめにしたようなプリンセススリーブス

春秋： メリヤスのシャツ、ブルーマー、コーセット、プリンセススリーブス

真夏： プリンセススリーブスの一種で肌着とサルマタが一緒になった形のもの、コーセット、プリンセススリーブス

どのシーズンでも最後に身に着けられている「プリンセススリーブス」とは、掲載の図版

から推測するとスリッパを意味していると思われる (Fig.4)。

この後の同誌において、下着の着装順に関する着装順序を拾い上げてみると、以下に示すようなものがある。

●昭和3年9月号 三越しらべ「婦人洋服の下着」(註18)

順序：シミーズ、コルセット、靴下、ブルーマ、スリッパ

●昭和6年10月号 三越洋服部しらべ「洋服下着の着方と下着の種類」(註19)

順序：ブラジエア、コルセット、シミーズ、ブルーマ(ドロアース)または、エンベロップシミーズ(シミーズとブルーマのつづいたもの)、スリッパ

●昭和7年5月号 中澤歌子「下着」(註20)

順序：《痩せた方》アンダーウェア、靴下ツリガーター、靴下、ブルマー、スリッパ《肥った方》アンダーウェア、ブラジエーヤとコーセットのコンビネーションになつた様なもの、ブルマー、スリッパ

●昭和9年6月号 小松加代子「此夏から洋装する方に贈る 洋装知識第一課」(註21)

「着方の順序は色々ですが、要するに無理のないやうにすればよいのです」として以下の事例が示されている。

順序：第一例 ブラジエア、シュミーズ、コーセット、ブルマース、スリッパ、第二例 ブラジエア、コーセット、パンテイース、スリッパ、第三例 コーセット、コンビネーションシュミーズ(ブラジエア、パンテイース、シュミーズが一枚に組み合わさつたもの、スリーインワンともいふ)、スリッパ、第四例(上が薄物でない場合) エンヴェロップシュミーズ、第五例(上が薄物でない場合) コーセット、コンビネーションシュミーズ

●昭和10年3月号 高島屋婦人部ドロシー・エドガーアス「春先に着心地よい洋装下着一揃ひご紹介」(註22)

順序：コーセット、ブラヂエアー、パンツ、スリッパ

●昭和12年11月号 田中千代「洋装姿に表情を作るには下着から」(註23)

順序：ブラジャー、シュミーズ、コルセット、靴下、ニッカーズ、スリッパ

●昭和14年5月号 橋本けい子「正しい下着の着方」(註24)

順序：コルセット、ブラゼア、ニッカー、シミーズ

昭和初期の『婦人公論』にも、以下のように洋装下着の着装順を解説する記事は多い。

●昭和4年11月号 佐藤都代子「洋装に必要な下着の裁縫と着付け」(註25)

順序：ユニオンアンダーウェア（筆者加筆：掲載の図よりコンビネーションを意味するものと思われる）、
コルセット、ストッキング、ブルマース、プリンセス・スリッパまたはシミーズ

●昭和7年7月号 松坂屋提供「下着の着方」（註26）

順序：ブラジエア、ズロース、シミーズ、コーセット、靴下、ブルマース、スリッパ

●昭和9年2月号 小澤静枝「簡単に寒さを防ぐ新工夫 洋装の下着として」（註27）

順序：ブラゼア、シミーズ、マーセット、スタツキング、シミーズ、ブルーマ、スリッパ

●昭和9年8月号 メイ牛山「夏姿を美しくする工夫」（註28）

順序：ブラヂエア、コルセット、パンツ、スリッパ

●昭和10年6月号 ドロシー・エドガーアス「夏の洋装お支度案内」（註29）

順序：ブラジエアー、シミーズ、コルセット、靴下、ズロース、ブルマー、スリッパ

●昭和12年1月号 杉野芳子「防寒用の下着」（註30）

順序：袖なしのコンビネーション、長袖のコンビネーション、毛糸メリヤスのシミーズ、
（毛糸メリヤスのドロワーズ（股明））、コルセット、靴下、ドロワーズ（股明無）、絹ブル
マー、（毛糸のスリッパ）、絹スリッパ

こうしてみていくと、コーセットカバー、エンベロップシュミーズ、コンビネーション
シュミーズなど、現在ではあまり聞きなれないアイテム、あるいは、ブルマー、パンテ
ィース、ズロース、ドロアース、パンツ、ニッカーズなど、同じ下穿きの一種だが違いが
はっきりしないアイテムがあり、着装の種類も順序も様々である。

おわりに

以上、大正・昭和初期の洋装下着について、その文化確立前の混沌とした状況をみてき
た。洋装下着の曖昧な情報が飛び交う婦人雑誌を頼りに、婦人達は、それぞれの解釈をも
って、ある人は家庭洋裁によって、ある人は既成の下着を購入することで、またある人は
洋裁店に注文することで、洋装下着を受容したのであろう。こうして徐々に洋装下着の文
化は確立しつつあったのだが、やはり婦人洋服の受容がそうであったように、このような
洋装下着受容の動きは戦争が近づく昭和10年代後半には中断してしまう。この時期の婦
人雑誌の下着にまつわる記事は、物資不足のなかでエネルギー節約のための、モンペや標
準服の下に着る防寒用の下着の作り方が目につく。そしてそこには、「婦人股引」、「ズボン
下」、「腹巻」など嘗ての華やかさは欠片も感じられない表記が並んでいるのである。

〈註〉

1. 杉野芳子『杉野芳子「炎のごとく」』、日本図書センター、平成9(1997)年、p. 91
2. 伊藤茂平「洋装の美をもたらす下着の知識」、『婦人画報』、昭和8(1933)年2月号、p. 129
3. 伊藤茂平「着易く形のよいシミーズの作り方」、『婦人画報』、昭和8(1933)年4月号、pp. 164-165
4. 伊藤茂平「胸の形を美しくするブラジエールの作り方」、『婦人画報』、昭和8(1933)年5月号、pp. 136-137
5. 伊藤茂平「バンティーズ二種」、『婦人画報』、昭和8(1933)年7月号、pp. 178-179
6. 伊藤茂平「姿勢を美しくするスリッパの作り方二つ」、『婦人画報』、昭和8(1933)年9月号、pp. 172-173
7. 杉野芳子「洋装相談 冬服の下着について」、『婦人画報』、昭和8(1933)年2月号、p. 440
8. 同上、p. 440
9. 松井寿「大正時代から昭和初期における洋装下着―雑誌記事を中心として―」、『服飾美学』第42号、平成18(2006)年、pp. 37-54
10. 「外出着のお支度」、『主婦の友』、昭和8(1933)年5月号
11. 同上、p. 64
12. 中澤歌子「下着」、『婦人画報』、昭和7(1932)年5月号、p. 186
13. 小澤静枝「簡単に寒さを防ぐ新工夫 洋装の下着として」、『婦人公論』、昭和9(1934)年2月号、p. 359
14. 田中千代「洋装美に表情をつくるには コルセットの話」、『婦人画報』、昭和12(1937)年12月号、p. 142
15. 同上、p. 143
16. 「婦人公論美容相談」、『婦人公論』、昭和4(1929)年4月号、pp. 200-201
17. 笹部とよ子「婦人服の下着の着方」、『婦人画報』、大正14(1925)1月号、pp. 8-9
18. 三越しらべ「婦人洋服の下着」、『婦人画報』、昭和3(1928)年、pp. 46-48
19. 三越洋服部しらべ「洋服下着の着方と下着の種類」、『婦人画報』、昭和6(1931)年10月号、p. 24
20. 前掲 中澤歌子「下着」、pp. 186-189
21. 小松加代子「此夏から洋装する方に贈る 洋装知識第一課」、『婦人画報』、昭和9(1934)年6月号、pp. 112-119
22. 高島屋婦人部ドロシー・エドガーアス「春先に着心地よい洋装下着一揃ひご紹介」、『婦人画報』、昭和10(1935)年3月号、pp. 111-113
23. 田中千代「洋装姿に表情を作るには下着から」、『婦人画報』、昭和12(1937)年11月号、pp. 95-97
24. 橋本けい子「正しい下着の着方」、『婦人画報』、昭和14(1939)年5月号、pp. 70-72
25. 佐藤都代子「洋装に必要な下着の裁縫と着付け」、『婦人公論』、昭和4(1929)年11月号、pp. 217-220
26. 松坂屋提供「下着の着方」、『婦人公論』、昭和7(1932)年7月号、頁無
27. 前掲 小澤静枝「簡単に寒さを防ぐ新工夫 洋装の下着として」、p. 359
28. メイ牛山「夏姿を美しくする工夫」、『婦人公論』、昭和9(1934)年8月号、pp. 278-281
29. ドロシー・エドガーアス「夏の洋装お支度案内」、『婦人公論』、昭和10(1935)年6月号、pp. 436-437
30. 杉野芳子「防寒用の下着」、『婦人公論』、昭和12(1937)年1月号、pp. 504-507

〈図版〉

- Fig. 1. コルセットの着装方法(左:後側、右:前側) 『主婦の友』17巻 昭和8(1933)年5月号61頁 KCI所蔵
Description of how to wear a corset in *Shufunotomo*, vol.17, May 1933, p.61. Collection of The Kyoto Costume Institute.
- Figs. 2. 大正期のドロワーズ(左:全体、右上:前部分、右下:後部分) KCI所蔵
Drawers of the Taisho period. Collection of The Kyoto Costume Institute.
- Figs. 3. 大正期の靴下(左:コルセットとウール製靴下、右:シルク製靴下) KCI所蔵
Corset and wool knit socks (left), black silk socks(right) of the Taisho period. Collection of The Kyoto

Costume Institute.

Fig. 4. 笹部とよ子「婦人服の下着の着方（冬の部）」『婦人画報』231号 大正14（1925）年1月号8頁（出典：臨川書店近代文芸・文化雑誌複製叢書 第2次『DVD-ROM版 婦人画報』より）
Toyoko Sasabe, "How to wear undergarments in winter," *Fujingaho*, no.231, January 1925, p. 8.

青木美保子（あおきみほこ）

1960年、山口県生まれ。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了。現在、京都女子大学家政学部准教授。専門は服飾史・服飾美学、ファッションデザイン。主に、近代日本の染色と着物図案、日本の洋装普及に関する研究をしている。主要論著に「大正・昭和初期の服飾における流行の創出—高島屋百選会を中心に—」（『デザイン理論』第44号、2004年）、「大正・昭和初期の着物図案—松坂屋の標準図案をめぐって—」（『風俗史学』第34号、2007年）、「機械捺染」（『繊維と工業』第66巻第10号、2010年）、「京都における染織工芸の近代化—古法「墨流し」の改良を中心に—」（『風俗史学』第53号、2013年）など。

（※肩書は掲載時のものです）